＜日本の真相８＞

　海部宮司との対談では、しきりにある著書について勧められた。それは、四国・大山祇神社の宮司、三島敦雄氏が書かれた「天孫人種六千年史の研究（スメル學會)」という著書である。シュメールと日本との関係について書かれているという。いろいろ調べ、また、東京・神田の古書店に出向いたりもしたのだが、見つけることはできなかった。
　しかし、2013 年の年明け、幸運にも手にすることができた。知り合いが海部宮司と対談した時、やはりこの著書を勧められ、四国まで出向いて何とか手に入れることができたという。その伝手で今回、入手することができた。何と、この著書のほとんどは、戦後、GHQ によって焚書されたらしい。それほど、彼ら（並びにその裏にいる国際銀行家）にとっては大変危険な著書、ということである。今回入手することができたのは幸運以外の何物でもなく、お導きなのだろう。
　著書は約 500 ページにも及ぶ大作であり、昭和 2 年（1927 年）の発行なので、書体も現代から見ればかなり古い体裁のもので、なかなか読みづらい。ここでは、重要と思われた部分について抜粋して記す。と言うのも、主張は以下のように首尾一貫していたので、枝葉末節なことまでは記す必要性が無いからである。

・基本的には記紀に基づき、皇統は万世一系である。
・皇室の祖はシュメールである。
・古代は海神、日神、火神を祀るのが通例で、日神は海神の子、火神は日神の子だから格は海神が最高で、次いで日神、そして火神である。これは、古代バビロニアに準じている。

　しかし、よくぞこの時代にここまで書けたもので、道理で、焚書の対象となるわけである。後書きには、（当時の）バビロン学会の原田敬吾氏から依頼された、とあり、三島氏は原田氏の研究を基に、神社方面からの考察を頼まれたわけである。以下、その概要を記し、これまでの考察と合わせて再考察する。
　なお、単語は解りやすくするために基本的には現代語表記とし、特にシュメールの「神々」の神名については、著者の記述名ではなく、既出の記述表記とした。また、私見は＊以下に記す。

1：概要
(1)天孫人種
・天孫人種はスメル（シュメール）族とセミチック（セム系)・バビロニアン族で、セミチック・バビロニアン族とは、中世以降のシュメール・アッカドの総称である。倭人族は前印度モン・クメール族である。隼人族・前出雲族はマレー・ポリネシアン族である。後出雲族は朝鮮ツングース族である。

・先着者であるアイヌ族は日本人種構成の種族ではない。次いで渡来したモン・

クメール族の倭人派は龍蛇神を祀ったり、自分たちが龍神の子孫と言った。次はマレー・ポリネシア族のチャム族で、隼人派、前出雲派等の長神、貴神（ムチノカミ)、咋神（クヒノカミ)、鴨神等の崇拝族である。次に朝鮮ツングース系の後出雲派であるオオヒルメムチ崇拝族、次にバビロニア系の天孫人種である。

・隼人国はマレー・ポリネシア語が、畿内中国地方は倭人語が主体である。

・地球上、シュメール系人種は日本民族をおいて他に無い。そして、世界に比類なき独特の血液型配分状態を示す。"SUME"はセム語での「神」の意味である。

＊天孫人種の分類はこれで解るが、最後に天孫人種系が渡来したということか？それは、最後に原始キリスト教の秦氏が渡来したことと重なるが、天孫人種系は海部氏系だから、あたかもその事実を隠すかのようである。
　ここで重大な問題は、これほど言語系統の異なる多民族ならば、渡来してから先住民との間で、どのように意思疎通を図ったのか、ということである。ここではその点について、まったく言及されていない。海部氏と原始キリスト教の秦氏が中東起源、徐福率いる物部氏がペルシャ系ユダヤ系統ならば、共通の中東語で意思疎通を図ることは可能である。
　なお、“世界に比類なき独特の血液型配分状態”と言うのであれば、その実例を挙げなければ、まったく説得力が無い。おそらく、昭和 2 年当時の世情に鑑みて、そのような主張となっているのだろう。

(2)大元の神々
・シュメール語で天神はアン（An）又はアヌ（Anu)、海神はエア又はヤー（Ea）又はエンキ（Enki）又はアッダ（Ada)、日神はウツ又はウト（Ut)、月神はシン（Sin)、火神はアグ（Ak)、軍神・暴風雨神はアダド（Adad)、セム語で火神はナブ（Nabu）又はギビル（Gibil)、南風神はシューチ（Shuci)、海神はティアマト（Tiamat）と言う。

・バビロニアの世界観としては、天海地の三界があり、天神アヌは最古の神だが、海の世界より地の世界と太陽界を生じた。すなわち、海神ヤーは地神エンキの徳を持ち、後に更に分化して地神エンリルの父となり、又、日神ウツの父神であった。これは、我が国でイザナギがまず地神を生み、最後に日神が生まれたという思想と一致する。

・バビロニアのエリドゥの光明教に依ると、海神ヤーは文化、医薬、生命、運命の神である。そのエリドゥの日神はドゥムジで、ヤーの子である。

・原始神話から見て、海神は水神を兼ね、海神より地神が生じ、地神より穀物の神徳が生じて分化した。

・バビロンの主神がマルドゥクになるに至って、エンリル、アヌは権力を譲り、エアは隠れて助言者となり、マルドゥクがあらゆる諸神の神格を有して、唯一一神教的傾向を現し、ユダヤ教やキリスト教の基となった。

・愛の女神イシュタルはギリシャではアテナ、ローマでは聖母マリアとなったが、キリスト教神話はほぼバビロニアが起源である。

・バビロニアの神字アンの略字である十字は、後世にキリスト教の十字架となり、インドの卍、支那の十字呪文となった。

＊マルドゥク、イシュタル、アンの十字などについては正しいと思われるが、この著書で基本とされているのはバビロニア神話であり、大元のシュメール神話ではない。だから、聞き慣れない火神アグや南風神シューチが登場したり、風神エンリルが地神へ、雷神アダドが軍神・暴風雨神へ、マルドゥクの息子ナブが火神へと変貌し、エンリルはエンキの息子とされてしまっている。また、ウツは月神ナンナル（シン）の息子で、シンの父がエンリルだが、ここではエンキがウツの父とされている。
　そして、海神エンキは水神を兼ねるのは良いとしても、海神より地神が生じ、地神より穀物の神徳が生じて分化したのなら、すべてはエンキが元の唯一神となり、そこにマルドゥクが重ねられてしまい、バビロニアの歪んだ神話となってしまったのである。

(3)皇室と古代の祭神
・天皇を明津神（アキツカミ）と言うのは、シュメール語の火神アグに由来し、日神ウツの子である。そして、セム語のミグト（Migut）がミコト、ミカドの語源である。

・古代は海神、日神、火神を祀るのが通例で、日神は海神の子、火神は日神の子だから格は海神が最高で、次いで日神、そして火神である。

・皇室に於いては、火神アグを以って明津神の御名とされた。

・火神アグはアク、アクバ、アキバ、アゴ、アコギ、アキ、アギ、アカ、アタゴ、イクタ、カグ、カゴ、カコ、コなどと変化した。

・火神アグやナブは稚日女と言い、単にヒメ、ヒ、ヒラ、ヒリ、ヒナ、ホ、ホホ、ホコ、ミホコなどと言った。

・稚日女（ワカヒルメ）は日神の子である火神を意味する倭人語の名称である。

・アグの配偶神タシメツはタフシ、タフセとなり、答志島の語源である。

・皇室は日神の本系だが、記紀編纂時に於いて、皇室並びにツングース系オオヒルメムチの子孫という後出雲派を日神の末裔とし、諸氏は天神地祇の子孫に改編させられた。

・皇室に於いては、本来の海神たるヤー、日神ウツ、火神アグ、御食津神ナグ、軍神アダド等を並祭した。

・本来、鏡は日神ウツ男神の表像、勾玉の首飾りは月神シン女神の表像、剣は軍神アダド男神の表像である。

＊
①火神アグ
　明津神は、シュメール語の火神アグに由来するという。しかし、シュメールや後のバビロニア神話・伝承を調べても、“アグ”という神名は登場しない。
　シュメールでの火神はヘンドゥルサグ（ヘンドゥルサンガ）で、配偶女神はニンムグ、父神はウツ、母神はニンリルとされているので、確かに火神は日神の息子ではある。古バビロニア時代には、セム系の神イシュムと同一視されたという。イシュムはジバルラの忠実な従者、あるいは、アヌ又はエンキの息子ネルガルの従者とされ、伝令神で火の神、人の守護神である。
（http://cypress.s2.zmx.jp/meso/参照。）
　このように、シュメールでもバビロニアでも、火神の神名は決して“アグ”などではない。では、その由来はどこなのか？それは、すぐに思い浮かぶ火神アグニで、インダスあるいはペルシャ由来に間違いない。Wikipedia には以下のようにある。

“アグニは、インド神話の火神である。ブラフマーの創造した蓮華から誕生したとする説や、太陽または石から生まれたとする説もある。また、誕生後すぐに両親を食い殺したとも言われる。
　妻はスヴァーハーで、一説に依るとスカンダも彼の息子であるという。アーリア人の拝火信仰を起源とする古い神だと考えられ、イラン神話のアータルと起源を同じくする。火のあらゆる属性の神格化であるが、特に儀式に於ける祭火として重視される。供物は祭火たるアグニに投じられて煙となり天に届けられ、神々はアグニによって祭場へ召喚される。すなわち、アグニは地上の人間と天上の神との仲介者であり、リグ・ヴェーダでは冒頭で讃歌が捧げられ、「アグニよ、あなたは存在する一切のものの牡牛。あなたは崇敬されるべき、闊歩するヴィシュヌ」「あなたはその掟の確固たる王、ヴァルナ（注)」「燃え立つ時にはミトラ」と説かれるなど、インドラに次いで多くの讃歌が捧げられ、極めて重視されている。
　また、彼は天上にあっては太陽、中空にあっては稲妻、地にあっては祭火など、世界に遍在する。ヒッタイト文書に見られる神格アクニ（Akni）はアグニからの借用だとする説もある。

（注）ヴァルナ神
　イランでは、宇宙の秩序と人類の倫理を支配する神とされ、ゾロアスター教が成立してからはアフラ・マズダーとされた。これは秩序と正義の神であることから、契約の神にもなった。
　インドでは、リグ・ヴェーダなどの諸ヴェーダに於いて、雷神インドラ、火神アグニとともに重要な位置に置かれ、天空神、司法神（＝契約と正義の神）、水神などの属性を持たされた。この段階ですでにブラフマン（梵天）によって始源神としての地位を奪われており、更に後には死者を裁くヤマ神に司法神としての地位を奪われるにつれ、水との関係から、やがては水の神、海上の神という位置付けが与えられることとなった。”

　誕生後、すぐに両親を食い殺したことは、日本神話でホノカグツチが誕生した時、イザナギが陰部を焼かれて死んでしまった逸話に対応する。
　拝火信仰の根源はペルシャとインドの創造神イナンナだが、“供物は祭火たるアグニに投じられて煙となり天に届けられ、神々はアグニによって祭場へ召喚される”ことは、不死鳥フェニックスそのもので火の鳥であり、原型はイナンナである。
　イナンナはエンリル系の牡牛族であり、ヴィシュヌの化身クリシュナはイエスの予型であり、イエスの原型はイナンナである。
　ヴァルナはアフラ・マズダーだからイナンナであり、水神としての性質は豊受大神と真名井の水、神器としての剣として表されているイナンナの属性である。その元は「生命の水」である。故に、アグが転じてアク、アカとなれば、それはラテン語のアクアであり、水である。
　ミトラは仏教に於いては弥勒菩薩となり、ミトラ共々、世界の終末時に降臨してくるというイエスそのものの性質がある。そのイエスの原型はイナンナである。

　以上のことから、火神アグはイナンナの象徴である。海神がエンキ、日神がウツ、火神がイナンナならば、イナンナはエンキの「生命の水」で蘇ったから水神（豊受大神）で、しかも女神だから、陰陽で言えば陰である。そして、火神は陽の日神に対して陰となる。つまり、イナンナは水神でもあり火神でもある。
　ならば、イナンナ＝豊受大神が火神アグに変えられたということを意味する！三島氏が言う“古代は海神、日神、火神を祀るのが通例”とは、“海神エンキ、太陽神ウツ、豊受大神イナンナ”という古代日本の「生命の樹」を構成する主三神のことなのである。

②明津神
　さて、明津神だが、この語源がアグというのはかなり苦しい。アキツと類似している言葉は“ア・キ・チ（地球の生命の創成）”である。＜神々の真相 3＞には次のように記した。

“イナンナは王たちと一緒に新年の祝いの儀式も行うようになった。そして、その王たちを“聖なる結婚”の儀式の掟の中に組み込んでしまったのは、サルゴンの後継者たちの、シュメールとアッカドの王たちの時代だった。最初の頃は「神々」だけが集い、アヌンナキの地球滞在記などが生々しく語り継がれており、“ア・キ・チ（地球の生命の創成）”と言われた。王権導入の後、イナンナは王たちをギグヌに招待し、彼女の“性のパートナーの死”を再現し始めた。死ねば、王は交代させられた。これは祭事全体の流れの中に取り込まれた。そのため、王たちはイナンナと一夜を過ごしても、何とかして死なずに済む方法を見つけ出さねばならなかった。そして、これは王の運命だけではなく、来るべき年が豊作となるか、凶作となるのかを占う神事でもあったのである。

この祝典の最初の 4 日間は、「神々」のみが参加した。5 日目に王が登場し、高位の従者を引き連れてイシュタル通りを行進する。王が神殿に到着すると、待っていた高僧が王の印（冠と笏）を取り上げ、至聖所の中の神の前に置く。そして、権力の印を奪われた王の顔を、高位の祭司が打ち叩く。それから王を跪かせ、王が犯した罪のリストを読み上げ、神の許しを求める“償いの儀式”に参加させる。次に祭司は、この街の外の、死を象徴する穴に王を導く。王は「神々」が彼の運命を定める相談をしている間、この穴の中に捕らえられている。9 日目に王は穴から出て、王の印を返され、再び行列を率いて街に帰る。そして、夜が迫ると体を洗い清め、香水を付けられ、いよいよギパールの館に導かれる。やがて朝になり、夜を生き抜いたことをすべての民に知らせるために、王はその姿を民の前に現す。こうして“聖なる結婚”の儀式が終わり、王は次の 1 年間の統治を許され、その地と領民は繁栄の時を約束される。”

すなわち、ア・キ・チとは「神々」の地球滞在記語りであり、本来の意味からすると、明津神はそれを継承する現人神ということである。それが、イナンナによって“性のパートナーの死”の再現となり、豊穣と繁栄を占う儀式となった。その点では、明津神とは「神」と対峙して豊穣と繁栄を祈る存在、と言えるだろう。ここでもまた、イナンナとの深い繋がりが判明した。

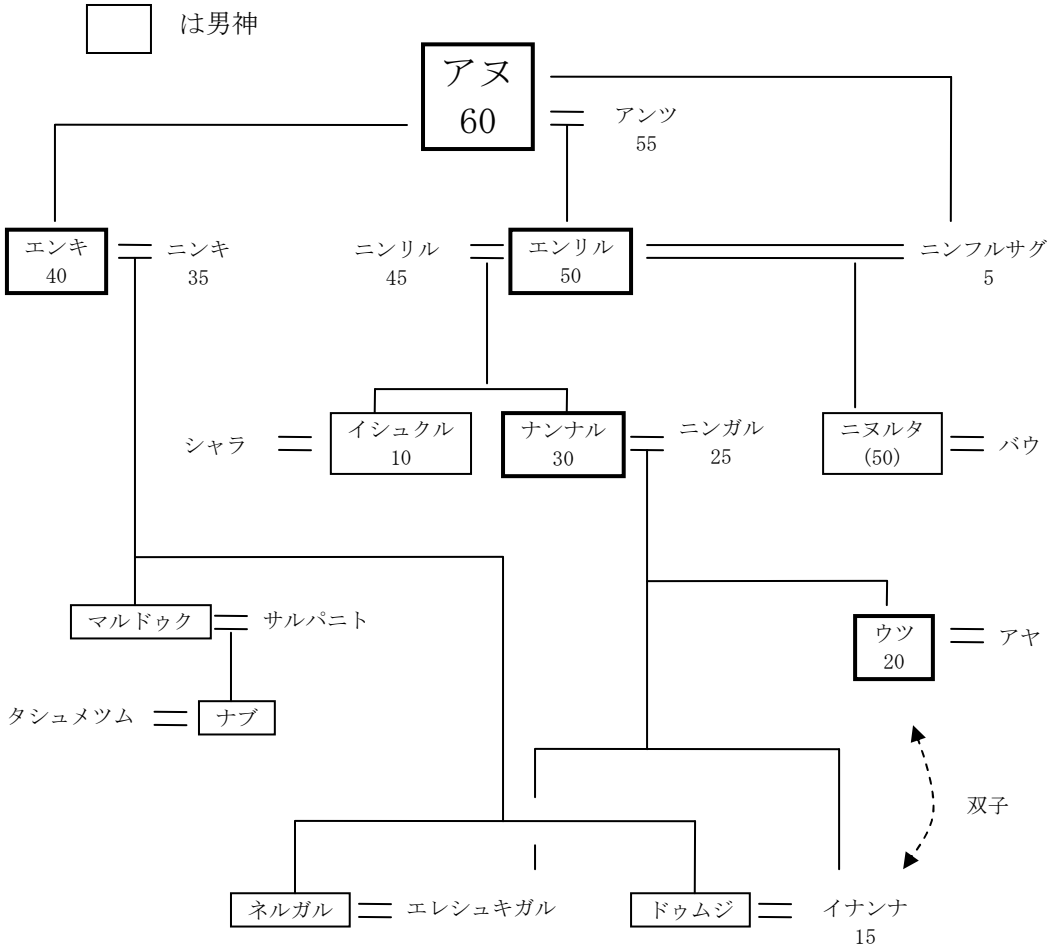
皇室の菊の御紋はイナンナのシンボルで、不死鳥フェニックスは火の鳥でイナンナの暗示だから、皇室は火神とも言える。それが山幸彦の火火出見であり、神武天皇の諡号ホホデミとなって、火神（転訛してホ、ホホ）は極めて重要であることを暗示している。すなわち、この国の最高神は火神＝隠された豊受大神イナンナであり、その大元は豊受大神＝イナンナを祀る籠神社ということである。

③稚日女

＜日本の真相 6＞で記したように、穴師の大兵主神社の右の神、若御魂神の“若”は元初の神々＝シュメールの「神々」のことに他ならず、中でも、イナンナのことであり、卑弥呼も象徴していた。ならば、稚日女＝若日女も同様のはずである。そういう点では、火神アグが稚日女と言われることは正しい。（なお、＜日本の真相 5＞に記した系図では、稚日女は卑弥呼ではなくトヨとした。その場合は、日女を卑弥呼と見なし、その後の世代という意味での“稚”であ

る。）
　しかし、ナブは本質的には違う。ナブはマルドゥクの息子であり、太陽神ラーであるマルドゥクがバビロニアの日神として振る舞うようになってから、日神ウツがマルドゥクと混同され、火神扱いとなったのである。

④日神は海神の子、火神は日神の子
　この理解には、「神々」の系図が必要である。



　日神ウツの父はナンナル＝シンで、王位継承数字は 30 である。シンは三日月が象徴だが、同じく三日月を象徴とするのはエンキである。この同じ象徴ということで、エンキとシンが混同されたことにより、海神エンキは日神ウツの父と成り得る。そして、シンは陽の日神に対する陰の月神ということで、女神とされてしまったのである。
　また、シュメールに於ける本来の火神は前述の通り、日神ウツの息子ヘンドゥルサグである。この火神と火神アグ＝イナンナが混同され、火神アグは日神

ウツの子と成り得る。
　以上、日神は海神の子、火神は日神の子となる。この火神に更にナブが重ねられた。そうすると、本来の火神＝豊受大神＝イナンナは火神として隠された上に、格も落とされたわけである。これは当然、秦氏に依ってである。
　イナンナは不死鳥フェニックス＝火の鳥の原型でもある。縄文土器などは火焔土器だが、縄文時代などはるか古代では、豊穣の女神が最も重要視されたから、それはイナンナである。つまり、火神として格落ちされたとはいえ、古代から崇められた最高神的性質は失ってはいないのである。

　なお、ナブが火神とされた理由はこれだけではなかろう。＜神々の真相 4＞に記したように、不死鳥フェニックス＝火の鳥は、マルドゥクがバビロニアの主神となってから、イナンナの行っていた“聖なる結婚”の儀式を彼流に解釈し直した＝でっち上げた結果であり、イナンナを象徴するフェニックスをマルドゥクの本来の領地であるエジプトに関連付けた。
　故に、マルドゥクが日神ならば息子は火神、ということでもあろう。

　このように、バビロニア神話を基にしているならば、事実としては正しくない。しかし、それは神道を構成する上での真実の可能性はある。真実と事実の違いを例を挙げて説明する。

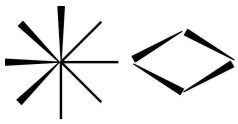
例：イエスは処女マリアから生まれ、十字架に掛けられて死んだが 3 日後に復活した。

　処女から人は誕生しないし、死んだ人間や「神々」は生き返らない。だから、この命題は「事実」ではない。しかし、キリスト教はこの命題を土台に構成されているから、キリスト教にとっては「真実」である。
　同様な思考により、歪んだバビロニア神話を基に神道が構成されたとしても、それは神道にとっては「真実」である。

(4) 太陽神ウツ
・日神ウツは倭人語ではヒメやヒルメ、ヒコやヒルゴ（ヒルコ）と言い、記紀編纂時に於いてはこれらを男女の称に誤解した。

・ウツが変化してウヅ、ウヂ、ウジ、ヲチ、ウサ、ウス、ウツツなどになった。

・ウツの楔形文字は菱型で、神宮の花菱はこれに他ならない。



神　　ウツ

・日神をヒルメと言うのは、モン・クメール語（インドシナ半島とその周辺で用いられる一群の言語）とその系統を受けた韓国語の古語である。

・古来、皇大神宮を内宮（ウチノミヤ）と言うのは、ウツの宮だからである。

・五十鈴はバビロニア語のイツズ（itsuzu）で、畏むべき、尊ぶべき、という意味である。

・神の鎮護地をナグ（Nagu）と言うので、日神の鎮護地はナグウツとなる。これが変化してナグサ、ナギサ、ナガサなどとなった。

＊男神ウツをヒメやヒルメと言うのは、やはり難があると思われる。ウツの楔形文字は、確かに花菱の原型なのだろう。

(5)丹生
・ギビルは吉備、ナブはニフ（丹生、丹敷）となった。火神ナブが転じてニブ、ニフ、ニュウとなった。

・大和の丹生川上神社は一に雨神とも言われ、丹生は火神ナブの変化で、火神を雨神として祀った。

＊本来の火神はイナンナだから、火神を雨神として祀る例はイナンナが元である。
　丹生は不老不死の妙薬だが、その元はイナンナであり、フェニックスである。確かに、フェニックスにはナブも関わっており、バビロンのマルドゥク神殿にはイナンナ神殿などと共にナブの神殿もある。神道の要素にバビロニア神話が取り入れられているのなら、丹生、丹敷の語源がナブである可能性は否定できない。
　しかし、イナンナをはじめとするエンリル系はマルドゥク一派とは敵対する中だから、ナブ由来ではなく、古代支那語や古代韓国語なども考慮する必要があろう。（ここではそこまでは追及しない。）

(6)海神ヤー
・大和はヤーの変化であり、大和国造の祖、珍彦は日神ウツで、海神を祀る氏族は子の日神名を以って呼称する。

・ナグ（神の鎮護地）・ヤー（海神）・ツ（入江、上陸場）が変化してヤーツとなり、それが更に転じてヤマツとなったと考えられるから、大山祇神は山の神ではなく海神である。

・海神の鎮護地をナグヤーと言い、ナゴヤ、ナガヤなどと変化した。

・八幡神の八幡（ヤアタ、ヤータ）は海神ヤーと助辞のタである。坂（サカ）はツングース語のサカで、清いことや神社を意味する。

・南風神シューチはシオツチノカミ、スミヨシノカミと変化した。

・海神ヤーが転じてイヤ、イヨとなった。

・海岸は"Aha"と言い、阿波などの語源である。

・下鴨神社の主神である賀茂武角身命のツヌはチヌ（シュメール語のチン、生命）の転訛で、海神ヤーの神徳に依る名である。

・賀茂は本来、チァム語（マレー・ポリネシア語族に属する言語で、カンボジアとベトナムに住むチャム族が話す）の稲田を守る意味で、チァム系に属する神の称号である。丹塗り矢伝説は、バビロニア系の神とチァム系の神との神婚神話である。

・下鴨は上賀茂の祖神とされているが、これは後世の異種族神話混合に因るものである。准后源親房郷著の二十一社記に依ると、山城の賀茂は天神で、鴨は地祇である。

＊大和がヤーの変化であることは、ある意味、認められるが、ヘブライ語のヤマトゥ（神の民）の方がしっくりくる。
　海神を祀る氏族は子の日神名を以って呼称することは、海神に代わって日神が最高神となったことを意味する。
　大山祇神は海部氏の海神、綿津見神と表裏一体だから、海神とも言える。ここでは、大山祇神社の宮司が、大山祇神は海神ヤー＝エンキだ、と言っていることが大変重要である。そして、同じ四国の阿波や伊予なども海神縁という点が実に興味深い。"Aha"の"A"は最初の文字で始まりだから阿吽の「阿」が充てられ、"ha"には海岸と関連がある「波」を充てられているが、「アワ」と読むのにわざわざ「ハ」の音の字を充てているのは、こういう意味が隠されていたわけである。
　名古屋が海神の鎮護地というのは、極めて納得できる。かつて、熱田神宮から南は海であり、海神が鎮護するには相応しい。また、名古屋市内の中心部には水主（かこ）町という水軍に関わる地名があり、熱田縁の源頼朝は熱海に水軍の大軍港を築いており、海神との深い関わりが伺える。
　南風神シューチというのは、これまたシュメールやバビロニアには見られない神名で、おそらく、エジプトの大気神シューのことだろう。
　丹塗り矢伝説が異なる氏族間の婚姻を暗示していることは理に適っているし、何よりも、本来は山城の賀茂は天神で、鴨は地祇であることが二十一社記に記載されていることは、海部宮司のお言葉を裏付ける。

(7)熱田神宮
・水神アッダは薩摩の古名、吾田（アタ）国の語源であり、ワダに変化してワタツミノカミとなった。また、同じく海神ティアマットはチマト、チマタ、タマトなどと変化し、タマの語源でもある。江はシュメール語のくエ（E）で、入江、湾、海峡、峡谷の意味である。

・熱田は暴風雨神・軍神のアダドが変化した名称であり、熱田はアダドの祝である。

・天叢雲剣を天照大神に奉ったというのは、前出雲派（スサノオ）と後出雲派（オオヒルメムチ）の神話であって、決して皇室には関係しない。これは、皇室の日神ウツを天照大神とすることにより、2 つの剣を同一物の如く誤解し、故に、天叢雲剣は断じて熱田神宮には無い。熱田では草薙剣を祀って日本武尊としているが、これは必ず武神アダドの称号に依り、蛇の尾から出たという天叢雲剣とは同一物ではない。

＊ここでは水神アッダと軍神アダド＝イシュクルを別神と見ているようだが、実は同一である。(アダド＝イシュクルは雷神だが、雷には暴風雨が付きもので、その様子は天の軍神のようでもあることから、後に暴風雨と水神、軍神の属性が付加された。故に、アッダはエンキのことではない。)
　熱田の称号は暴風雨神・軍神のアダド由来だとしているが、名古屋の地名からしても、吾田国同様、ここでは水神としての属性が優位だと考えられる。そこに、草薙神剣を奉祭するにあたり、軍神としての属性もあるアッダ＝アダドに因んで熱田と名付けたのだろう。

　水神の属性は、名古屋が海神エンキの鎮護地であることと、神器では剣となり、神饌では（真名井の）水だからイナンナをも暗示する。その神器、草薙神剣は当初、天村雲剣で「雨」に関連するから水神の象徴。そして、日本武尊が焼津の地で火攻めに遭遇した際、倭姫からもらった火打ち石で火をおこし、剣で草を薙いで助かったことにより草薙神剣と命名されたから、草薙神剣は火神の象徴でもある。そして、古来、火神は雷神とも同一視されたので、そこに雷神で水神、軍神のアダドの名を持ってくることは極めて妥当である。

　熱田本殿の祭神は熱田大神で、草薙神剣を依り代とした天照大神あるいは日本武尊とされているが、＜日本の真相 5＞に記したように、天照国照尊と豊受大神の二柱を暗示していた。この場合、天照国照尊は太陽神ウツ、豊受大神はイナンナである。また、＜日本の真相 6＞に記したように、太古の神祭りでは太陽神を祀るために剣を奉じたが、その剣はイナンナの暗示である。
　本殿では建稲種命と宮簀媛命も祀るが、＜日本の真相 4＞に記したように、建稲種命は“稲の種＝籾”で豊受大神を暗示しており、宮簀媛命の“宮簀”は籠神社の鎮座する“宮津”に通じ、建稲種命が豊受大神、宮簀媛命が籠神社の鎮座する宮津を象徴し、豊受大神を本来の主神とする籠神社を暗示している。

別宮の上知我麻神社にはこの二方の父である乎止與命が祀られているが、乎止與命の時代にトヨが天照国照尊（と重ねて卑弥呼）を本格的に祀るようになって、ようやく国が統一されたから、乎止與命は邪馬台国建国の一族と太陽神ウツの暗示である。
そして、境内摂社の孫若御子（ヒコワカミコ）神社では天火明命が祀られており、前述のように“若”はイナンナと卑弥呼の暗示で、また、天火明命はイナンナの暗示である。

このように、熱田神宮は海神エンキ、太陽神ウツ、豊受大神＝火明命＝イナンナ、雷神イシュクル、卑弥呼、トヨがすべて勢ぞろいしている大変な神の宮であり、神器があって然るべき宮である。
故に、三島氏が言うような天叢雲剣の解釈は誤りと言える。

(8)籠神社と豊受大神
・籠神社はコノミヤとも言い、コは火神アグの転訛だから、火明命を祀る。

・火明族の祖、天香語山命は大隅国鹿児山の襲名である。

・丹後の原型タニワはタムバの転訛で、タムは日神の神徳に依る名称である。また、吉佐宮のヨサはウサ＝ウツに通じるから、日神ウツの変化である。

・海部のアマはシュメール語のアマ（Ama）で、アは水、マは助辞で、海の意味である。

・外宮の神は鎮座当時、奈具神と言われ、シュメール語のナグ（Nak）は神饌、犠牲の意味である。それを、チァム語系の豊受大神とした。なお、奈具神は本来の神名ではない。バビロニアに於いて、日神ニンギルスの大女神ニナの妹ニサバが五穀豊穣の神であり、それが本来の神名である。

・外宮の鎮座する山田の地は海神ヤーの地である。海神は日神の父神だから、外宮先祭は当然である。

・外宮の元伊勢とされる丹波の真名井神社は断じて豊受大神などではなく、奈具神である。ナグは前述のように御食津神である。故に、外宮が丹波より遷されたというのは後世の錯誤に過ぎない。

・ヒホコはオオヒルメノムチの子である火神の意味である。故に、天之日矛はホホ（火火）コでもある。

・田道間守由来の橘の語源はシュメール語のアアヅバ（Aaduba）で、海の意味である。これが転じてタツバとなり、誤解されてタチバナとなった。

＊天香語山命は大隅国鹿児山の襲名ではなく、天村雲命の先発隊として到着した天香語山命に因んで（＜日本の真相 5＞）“鹿児山”である。
　タムとはタンムズ＝ドゥムジのことで、イナンナの婚約者だから、あながち間違いとは言えない。が、“ヨサはウサ＝ウツに通じる”というのは、少々こじつけ過ぎだろう。ヘブライの民を率いてカナンの地に入ったヨシュアの方が適切である。同様に、橘の語源もかなり無理がある。
　ニサバは＜神々の真相 1＞に記したように、キシュでは聖なるニサバが書くことを教え、ニンカシがビール作りを教えたから、ニサバは筆記の女神であって、五穀豊穣の神ではない。（ニンギルスはニヌルタのことである。）
　奈具神を神饌、犠牲を意味するナグに結び付けるぐらいなら、外宮の鎮座する山田の地は海神ヤーの地だと言っている以上、ナグは前述の“神の鎮護地”のナグの方が適切であり、意図的に豊受大神を陥れているように思われる。これは、“外宮の元伊勢とされる丹波の真名井神社は断じて豊受大神などではなく、奈具神で、外宮が丹波より遷されたというのは後世の錯誤に過ぎない”と断じていることにより裏付けられる。

　このように、かなり都合の良い解釈をゴリ押しし、徹底して籠神社の真相を隠している。しかし、この著書は、その籠神社の海部宮司からお勧めされたものである。また、発刊当時には海部氏系図は公開されていない。ならば、海部宮司の真意を汲み取る必要がある。それについては、後述する。

(9)猿田彦関連
・猿田彦は逸話から海神でもあるが、亦名が八衝に因んでチマタなのは、バビロニア語のチマタ（海）が元である。

・猿田彦の猿はセム語系のシャル又はサルが語源で、王の意味である。これがチァム語ではサダル（先駆者）という意味に誤解された。

・猿女君はシャイールが語源で、神託を求める神職名である。

＊大筋はこの通りだろうが、サダルがサルタとは少々苦しい。
　＜日本の真相 5＞に記したように、猿田彦には天照国照尊の属性があり、その本質は海神エンキの息子、ニンギシュジッダである。海神の息子だから日神であり、実際にニンギシュジッダはエジプトの一時期とマヤでは太陽神だった。

(10)その他
・長脛彦（チァム語で天龍）はチァム族の長であり、紀伊のキは古韓国語で、森の意味である。

・物部の物はツングース語の霊（もの）の意味で、古国語の神職の意味だから、断じて武闘集団のことではない。

・ニギハヤヒの子、ウマシマチの名はバビロニア語のマシマシあるいはマシマシュで、神職の名称である。ニギはニグ、ハヤはチャム語の光栄、ヒは日あるいは火である。

＊物部氏は武闘集団とばかり思われていたが、石上神宮で物部氏の祖、ウマシマチが祀られていることなどからすると、やはり神職系なのだろう。それが、石上神宮が朝廷の武器庫だったこともあり、混同されたのだろう。

・忌部はエンベル（Enbel）で、エンはシュメール語の祓詞の意味、ベルはバビロニア語の首長の意味で、祓詞を奏上する神職のこと。日本後記などからすると、忌部氏は奉幣祈祷が職種で、中臣氏の職種は神供を掌ることである。

・阿波忌部氏の祖、天日鷲命の語源はアッシリアの主神アシュア（アシュラ）に基づく。

＊これもかなり苦しいが、そうだとしたら、アシュラ＝イナンナである。しかし、それよりも神としては太陽神ウツの方が適当だろう。ウツはしばしば鷲の羽をまとった太陽神として描かれているからである。そこに、同じく翼を描かれたイナンナを重ねた可能性はある。

・中臣の語源はナグツアミルで、ナグはシュメール語の神饌、犠牲の意味で、アミルはバビロニア語で人あるいは徒の意味である。

＊本来の中臣系は海部氏系だから、このナグは神の鎮護地の方が適切だろう。

・春日はカガスの隣音転訛で、案山子（カカシ）と同様に「カガス」で、火を焚いて猛獣を威嚇する意味である。

＊春日は＜神々の真相 2＞に記したように、三柱の太陽神を意味する。よって、猛獣を威嚇する火ではなく、カガ、カグ＝輝きが語源と思われる。

・天神アヌを祀る祝を天野祝、月神シンを祀る祝を小竹（シヌノ、シナノ）祝と言う。月神シンはシヌ、シナ（志、科、信）となった。

・更科のサラはバビロニア語で信者の意味、シナは月神だから、月神の信者という意味である。

・諏訪の語源はシュメール語のズアブ（Zuabu）であり、深淵、海の意味である。

・諏訪大社前宮の前は本来キサキと読むべきで、前宮は建御名方命の后（八坂刀売命）が祀られる后宮である。

・日高はヒコ＝ホコ、穂高はホコと読み、ヒ＝ホ＝火、コ＝神のことだから、日高、穂高とは火神のことである。

・宗像（ムナカタ）のムはミの転訛でチャム語の敬語だから、ムナカタとはナカタ、ナガタであり、ミナカタ（御名方）と同義である。チャム語でナガは龍の意味である。

＊故に、諏訪大社の建御名方命は龍神＝蛇神であり、古くは蛇神のミシャグチが祀られたわけである。

2：まとめ

1：では特に重要な部分を抜粋して考察したわけだが、まとまりに欠けるので、ここで重要事項をまとめる。

・シュメール神話が歪んだバビロニア神話・伝承が基となっている。

・古代は海神エンキ、日神ウツ、火神アグ＝イナンナを祀るのが通例で、日神は海神の子、火神は日神の子と見なされ、格は海神が最高で、次いで日神、そして火神とされた。

・最高神だった豊受大神＝イナンナは火神として格を落とされ、隠された。

・山幸彦の火火出見、神武天皇の諡号ホホデミは、火神、すなわち隠された豊受大神イナンナの暗示であり、その大元は豊受大神＝イナンナを祀る籠神社である。

・天皇を明津神と言うのは、「神々」の地球滞在記語り（ア・キ・チ）由来であり、本来の意味からすると、明津神はそれを継承する現人神ということである。それが、イナンナによって“性のパートナーの死”の再現となり、豊穣と繁栄を占う儀式となった点では、「神」と対峙して豊穣と繁栄を祈る存在、と言える。

・神宮の御紋、花菱は太陽神ウツの楔形文字が原型である。

・神の鎮護地をナグと言う。

・大山祇神は海神ヤー＝エンキであり、大山祇神社が海神を祀る総本山である。

・名古屋の地名の由来は、海神ヤーの鎮護地という意味であり、熱田の地名の由来は雷神で水神、軍神のアダド＝イシュクルである。

・熱田神宮は海神エンキ、太陽神ウツ、豊受大神＝火明命＝イナンナ、雷神イシュクル、卑弥呼、トヨがすべて勢ぞろいしている重要な神の宮である。

・かなり都合の良い解釈をゴリ押しし、徹底して籠神社の真相を隠している。

3：考察

2:のまとめを基に、この国の真相について考察する。

(1)神祭りの変遷

＜日本の真相 7＞に記したように、この国の主要三神はエンキ、イナンナ、ウツで、「生命の樹」には次のように対応した。

・慈悲の柱：イナンナ。
・均衡の柱：エンキ。
・峻厳の柱：ウツ。

最高神はエンキだが、均衡の柱はほとんど表に登場しないから、実質の最高神は慈悲の柱のイナンナである。

今回の調査により、あらゆるところに海神は暗示されているものの、具体的な神名として祀られているところは極めて少ないことからも、エンキは均衡の柱である。海部氏はその名の通り海神族だが、アマカミ＝天神族でもあるが故に、彼らの実質の最高神イナンナと共に、本来の最高神エンキを祀っていたと考えられる。そして、太陽が昇る方角の国に渡来してきたわけだから、太陽神ウツも併せ祀った。

その後、徐福率いる物部氏一団と一体となり、海部氏が筆頭となったものの、片や海からの渡来、片や大陸からの渡来ということで、小競り合いは続いたのだろう。古代に於いては祭祀が最も重要だったから、その小競り合いの原因は神祭りに他ならず、どの神を最高神として祀るか、ということだったと推測される。それが、卑弥呼が前期統一国家の祭祀女王となった時に、祭祀器具が銅鐸から鏡に変わったことから、最高神も変わったと考えられる。

シュメールでの“聖なる結婚の儀式”からすると、男神を祀るには女性、女神を祀るには男性の方が適している。そうすると、卑弥呼が登場する以前の男王の時代には豊受大神＝イナンナが海部氏によって祀られていたが、物部氏の一部はそれに不満だったのだろう。そこで、おそらく両者に共通だった太陽神ウツを新たな最高神として祀ることにより、解決を図ったと考えられる。それが、銅鐸から鏡への変化として暗示されているのだろう。＜日本の真相 7＞に記したように、太陽神ウツのシンボルは六芒星でユダヤのシンボルの根源であり、海部氏も物部氏もユダヤの一族だから、そのような妥協案が採用されたことは辻褄が合う。

しかし、卑弥呼亡き後、男王を立てたら国が乱れた。男王を立てたというこ

とは、女神に変わったという意味で、最高神がイナンナに戻されたと考えられる。そこでまた、国を揺るがすような内乱が起き、それを治めるために、再びトヨを女王とし、太陽神ウツを祀ることによって、ここに大邪馬台国として統一国家の完成形となったのであろう。

すなわち、大邪馬台国では太陽神ウツを最高神・天照国照尊として尾張氏と物部氏の中の中核である葛城氏が協力して祀り、イナンナは籠神社で豊受大神として祀られたと考えられる。その際、太陽神の分身を鏡、依り代を熱田神宮の項でも記したように、イナンナを暗示する草薙神剣として奉じ祀ったと考えられる。(鏡は息津鏡・辺津鏡だが、これを共に大邪馬台国で祀ったのか、1 枚は籠神社で祀ったのかは不明である。)

ウツは“国照”を冠することで、大地母神の役割まで担うこととなり、豊受大神は隠れがちになってしまった。ウツが陽ならイナンナは陰で、神饌としては（真名井の）水、神器としては剣であり、剣はスサノオ＝イナンナ由来で、八岐大蛇は「8」だからイナンナのシンボルである。イナンナが掛けられた木は「生命の樹」で、剣はアロンの杖という木でもあり、神が降臨する依り代である。また、イナンナの亦名はアシェラで、これが転じてハシラ＝柱である。つまり、太陽神を祀るために剣が必要なのは、実質の最高神がイナンナだからである。

では、海神エンキも籠神社で祀られたのか？大邪馬台国以前はそうだったのだろうが、しかし、三島宮司の一連の見解（特に海神ヤーの重要性と、海神の総本宮が現在、大山祇神社であること)、そして、籠神社を徹底的に陥れているにも関わらず、籠神社の海部宮司がその著書を読むように勧めているのは、それなりの意味が隠されているはずである。

大邪馬台国は 11 世孫・小登與命の時代だが、その一世代前の 10 世孫の世代に安波夜別命（アワヨワケノミコト）がいる。名前からして、四国の阿波に関わりが深く、この時点で海部氏の一派が四国に分家したと考えられる。この世代は 9 世孫・日女命＝卑弥呼と 11 世孫・日女命＝トヨの間であり、内乱が勃発していた時代だから、国内の安定化に向けて、祭祀の再編が図られたと考えられる。よって、この時点で海神エンキ、豊穣神で実質の最高神イナンナ、太陽神ウツを祀る祭祀場を分け、大邪馬台国（後に伊勢）ではウツを太陽神の天照国照尊として、籠神社ではイナンナを豊受大神として、そして、四国に渡った安波夜別命の系統の大山祇神社で海神エンキを祀ることになったと考えられる。これが神話では、崇神天皇（11 世孫・小登與命）6 年に、宮中に祀られていた天照大神と倭大国魂を皇居の外に遷した、という逸話になっているのである。

・大邪馬台国：天照国照尊＝ウツ。
・籠神社：豊受大神＝イナンナ。
・大山祇神社：海神＝エンキ＝ヤー。

この後、秦氏が渡来すると、天照国照尊ウツにイエスと卑弥呼が重ねられ、

新たな宮として伊勢（最初は伊雑宮、続いて内宮）に女神・天照大神として祀られるようになった。と同時に、豊受大神イナンナは外宮に勧請され、男神を表す陽数に変えられ、籠神社の主神は火神に格下げされて、豊受大神の真相は隠された。イナンナは豊穣神だが、収穫物と火が合わされば料理ができるので、必然的に御食津神でもある。

また、秦氏の主神イエスの「合わせ鏡」が旧約の"YHWH"で、その語源は当然ヤーだから、海神エンキ＝ヤーが祀られる総本山のある四国に秦氏（の多く）は隠れた。エンキの象徴は三日月だから、安波夜別命は阿波に入って夜の月となった、とも言える。そして、秦氏は弓月君に率いられて渡来したとされており、月と深い関わりがあり、四国が海神ヤーの三日月で象徴される地なら、そこに秦氏が隠れても矛盾しない。このように、秦氏にとっても海神ヤーは大変重要で、ヤーとイエスが揃って完結となるから、四国は重要な地である。

これを日本列島の南側、昼の太陽の方角から見ると、向かって右が伊勢、中心が籠神社、左が大山祇神社となるから、これは「生命の樹」に当てはまる。

・慈悲の柱：伊勢＝天照大神。
・均衡の柱：籠神社＝豊受大神＝実質の最高神＝スサノオ。
・峻厳の柱：大山祇神社＝海神＝本来の最高神＝月読命。

これはイザナギから生まれた三貴神そのものであり、イザナギが南を向いていれば、誕生神話の位置（左目＝向かって右：天照大神、鼻＝中心：スサノオ、右目＝向かって左：月読命）とぴったり重なる。

秦氏渡来以前は神殿は東西に向いていたが、秦氏渡来後は南北に変えられたから、このような見方は正しい。

(2)イナンナと艮金神（ウシトラノコンジン）

①艮金神

以上、見てきたように、イナンナ＝豊受大神は火神とされて隠され、格も落とされた。同じような神が、新興宗教の大本教でも言われている。それは、艮金神である。艮金神は、日本書紀では宇宙創造の神とされながら、悪神たちの手によって艮の方角に押し込められた国常立尊だという。しかし、「時」が満ちればこの国常立尊によって“三千世界の立て替え、立て直し”が行われるという。

国常立尊は日本書紀では最初に現れた神であり、古事記では天之御中主神に相当する。籠神社の秘伝では、天之御中主神＝豊受大神だから、イナンナである。メソポタミアではイナンナは獅子や虎などを従えた図で描かれ、それが中南米では豹やピューマに変わっているので、虎＝寅はイナンナの象徴でもある。

また、艮＝丑寅は丑＝牛も含まれるが、イナンナは牡牛として象徴されるエンリル一族である。インダスではイナンナはシヴァ神で、シヴァ神＝牛頭天王で、やはりイナンナは牛にも関係がある。そして、牛頭天王＝スサノオで、秦氏の最高神・女神アマテラスに反抗した格下の神とされたことは、豊受大神が

火神として格下げされたのと同構造である。

②鬼と艮金神
　ここで、一見論点が変わるようだが、節分の鬼について考える。日本に於ける節分発祥と言われている吉田神道の総本山、吉田神社の節分追儺（ついな）式は興味深い。これは、かつて宮中で行われていた追儺式を外で再現したものである。

　赤鬼、青鬼、黄鬼の三鬼と方相氏（ほうそうし）が登場し、方相氏が鬼を追い払う。方相氏とは、黄金四つ目の仮面を被り、矛と楯を持った鬼祓いの人物で、黄金はニビル、四つ目は神の戦車メルカバーの象徴だろう。
　鬼が退散すると、3 人の神職がそれぞれ 3 回ずつ、桃弓で葦（よし）矢を放って魔を祓い終了となる。桃は支那由来の邪気を祓う物であり、イザナギが黄泉の国から帰る時、鬼に追われた際に投げつけた。支那の桃は西王母伝説に依り、その西王母は支那から見て西の国の女神イナンナに他ならない。桃は「兆しの木」だが、西王母の原型がイナンナである以上、それは「死んだはずの者が蘇った、復活の兆しの木」なので「生命の樹」である。また、黄泉帰りの原型はイナンナの冥界下りである。
　葦を「よし」と言うのは宮中の忌言葉で、本来は「あし」であるから、葦原中国＝シュメールの暗示である。弓で象徴されるのは、射手座が割り当てられている軍神ニヌルタの暗示である。（因みに、8 月に秦氏の中核、下鴨神社で行われる矢取神事では 50 本の矢と言われる葦が御手洗（みたらし）池に立てられるが、50 は射手座のニヌルタの王位継承数字で、故に「矢」と言われる。）
　そして、マルドゥクの策略によってドゥムジを失ったイナンナとエンリル一族は、ニヌルタを司令官としてマルドゥク軍を木端微塵に粉砕した。

　つまり、邪気を祓うこの神事は、邪気はマルドゥク一派で、それを粉砕したニヌルタとイナンナを暗示しているのである。3 人の神職が 3 回弓を射るのは合計 9 本で、九字を切るのと同じで、九字切りは魔を退散させる陰陽道や修験道の術である。

　ところで、鬼は何故か、金棒を持っている。熊野大社の九鬼（くかみ）一族は海部氏・尾張氏の支族だが、正確には「鬼」の上の点を取った字を使って「かみ」と読ませている。つまり、鬼の角が無くなった状態が「神」ということで、鬼は本来鬼ではなく、神だった存在が鬼とされた、という暗示である。これは、海部氏・尾張氏が異形の者とされてしまったことと対応している。
　つまり、牛の角があり、虎の毛皮を履き、手に金棒を持っている鬼は本来神だから、実は鬼とは牛虎金神＝艮金神なのである。その真相は、火神とされて隠され、格も落とされた海部氏系の最高神、豊受大神＝イナンナである。火神は、怒りの火の象徴でもある。
　そして、艮＝丑寅はそのような怖い一面を有するイナンナの方角とされ、怒らせるとイナンナはとても怖い存在、という戒めでもある。艮金神は怖い神と

して知られており、吉田神社は都の鬼門＝丑寅の方角に当たる。

よって、魔・邪気はマルドゥク一派、鬼はイナンナ＝艮金神＝豊受大神＝海部氏・尾張氏一族の暗示である。このように、大本の艮金神の話は＜日本の真相 7＞に記した海部宮司のお言葉、“これからは豊受大神の時代である”と妙に一致する。

なお、艮とは反対の方角（裏鬼門）は坤＝羊申だが、羊はエンキの息子ドゥムジでイナンナの婚約者、申はエジプトの知恵の神トートで正体はニンギシュジッダで、カッバーラを考案した張本人である。

(3)イナンナと般若心経

＜神々の真相 3＞では付録として般若心経の意味を記したが、何故か、神道大祓全集の最後にも掲載されている。これは、単なる神仏習合の名残だけではないだろう。

般若心経とは「生命の樹」の真理を悟るためにはどうしたら良いのかということを、ある種の高みに到達し、そこから観ることができる観自在菩薩が弟子のシャーリプトラに説いている情景描写である。そして、観自在菩薩とは“すべてを見通す目”の象徴に他ならず、“エンキ＝ニニギク（目の清い神）の目”であった。その心理を悟る方法とは、次のような方法であった。

“従来の固定観念に縛られることなく、無我を認識することにより（照見五蘊皆空）心に妨げが無い状態（心無罣礙）となり、「生命の樹」を上昇していく（遠離）ことができる。そして知恵を得て超越したものの見方ができるようになり（究竟涅槃）、「神界」の真理（阿耨多羅三藐三菩提）に至る。

瞑想の際に唱えるマントラは、「ガテー、ガテー、パーラガテー、パーラサンガテー、ボーディ、スヴァーハー」である。これは“知恵という完成”を讃えるマントラである。“知恵という完成”とは、一般的な知恵を超越して、「生命の樹」に隠された真理を知ることに他ならない。”

ここでは著者（「真釈　般若心経」、宮坂宥洪著、角川文庫）の主張に合わせて“知恵という完成”を讃えるマントラとしたが、いまひとつ、その意味が見えなかった。ところが、国立民族学博物館名誉教授の立川武蔵氏が毎週土曜日に「ブッダをたずねて」と題したエッセイを中日新聞に掲載しているのだが、2013 年 2 月 9 日付の朝刊では『「般若心経」の女神』がテーマで、大変興味深い内容だったのでその概要を記し、それを基にこのマントラの意味を再考する。

・概要

悟りの智慧を般若と言う。波羅蜜多とは、彼岸に至った者（女神）あるいは完成を意味する。すなわち、般若波羅蜜多とは、智慧（般若）という菩薩の修行綱目を言う。

心経では五蘊無く、感覚器官無く、感覚器官の対象も無く、四つの真理無く、

云々と言う。ならば、般若波羅蜜多も無いと言うべきなのだろうが、否定しないどころか、三世（過去・現在・未来）の諸仏は般若波羅蜜多に依って悟りを得たと言う。更に無上の真言（マントラ）であり、真実の言葉であると讃嘆する。その真言は「ガテー、ガテー、パーラガテー、パーラサンガテー、ボーディ、スバーハー（掲載のママ）」である。

ガテーとは、女性名詞ガター（行きたる女性）の呼びかけの形である。「行きたる女性」とは悟り、つまり、般若に他ならない。ここでは般若が女神と考えられている。

パーラガテーは「向こう岸に行った女性（女神）よ」を、パーラサンガテーは「向こう岸に行き着いた女性よ」を意味する。ボーディは「悟りよ」のことだ。スバーハーは掛け声である。

現存する最古の心経のサンスクリット写本には「般若波羅蜜多の心」とあり、「経」の文字は無い。この心（フリダヤ）とは真言を意味する。つまり、心経はいわゆる経ではなく、女神般若波羅蜜多の称名を勧めるメモなのである。（次の写真は http://ameblo.jp/bluedeloi/day-20130123.html より転載したもので、北インドのラダック・アルチ寺院にある女神・般若波羅蜜多の壁画。）

・再考

「行きたる女性」「向こう岸に行った女性（女神）」「向こう岸に行き着いた女性」が悟りの智慧を得た女性・女神ならば、それは知識のメーを得た知恵の女神、メーのレディ、イナンナに他ならない！

また、「行きたる」「向こう岸に行った、行き着いた」をイナンナの奔放な性的側面から解釈するなら、「性的に愉悦を得た女性、女神」ということでもあり、“聖なる結婚の儀式”の大元であるイナンナに相応しい。

すなわち、このマントラは知恵の女神で豊穣神イナンナへの讃歌に他ならない！道理で、イナンナが掛けられた木、イナンナが好物だったナツメヤシ（の実）が原型となっている「生命の樹」の真理を悟る内容なわけで、イナンナが掛けられた「生命の樹」の象徴たる十一面観音に対して唱えられることは最も相応しい。

そもそも、インダス文明の創造神はイナンナだから、当然と言えば当然の結果ではある。インダス文明ではいろいろな“修行”が登場するが、これもイナンナを歓ばせるための肉体的・精神的強靭さを得るためのもの、という解釈から生じたものだろう。また、仏教の秘密の教えであるチベット密教には男尊が女尊を抱く秘密集会タントラがあるのも、同様な理由だろう。

日本に於ける「生命の樹」への最大の讃歌は、東大寺のお水取りである。これについては＜籠神社 2＞に記したが、若狭の遠敷（おにゅう）川を遡った白石神社から成されるお水送りの“お香水”は「生命の水＝真名井の水」でイナンナの暗示であり、東大寺の修二会では十一面観音＝「生命の樹＝イナンナの樹」を本尊とし、天下泰平、五穀豊穣などを願って祈りを捧げ、人々に代わって懺悔する十一面悔過（けか）が行われる。これは、前述した“聖なる結婚”の儀式と同じ構造である。

修二会では道明かりとして大きな松明が焚かれるが、これはシュメールで「神々」を空から迎える際、篝火を焚いて迎えたことに由来するし、また、火神を暗示するならば、これもイナンナに他ならないが、火神と見なす方がより妥当であろう。

神道大祓全集の最後に般若心経と聖不動経があるが、不動尊＝不動明王も火の神で剣で魔を祓うから、これもイナンナの暗示である。そして、不動尊剣功徳の文（ふどうそんけんくどくのもん）には“さめの小数は天の末社、これ三百六十餘神を表し、中にもあらき親ざめは、よひの明星、よなかの明星、よあけの明星をあらわす”とあり、明星＝金星でイナンナとの関わりを暗示している。そして、不動明王は大日如来の化身とされ、大日如来は女神・天照大神と習合したから、神道、仏教共に日本の最高神はイナンナであることを暗示している。故に、仏教は必然的に神道と習合した。

(4)御遷宮と降臨

2013 年は神宮の第 62 回御遷宮の年であると同時に、史上初めて出雲大社の御遷宮とも重なることはこれまでにも述べてきた。更に、熱田神宮創祀 1900 年も重なるので、海部氏・尾張氏系と葛城系（出雲系）の最重要の宮の最重要な御神事が重なる（意図的に重ねられた）わけである。

出雲はかなり前から 5 月 10 日と決まっていたが、年明けに熱田神宮の創祀 1900 年祭は 5 月 8 日と公開された。つまり、出雲と神宮に先駆けて熱田が行われるわけである。しかし、熱田の例祭は 6 月 5 日であり、それよりも早めて、わざわざ出雲の御遷宮の前に設定されたことは、それなりの意味があるはずである。

1 つは、＜日本の真相 6＞に記したように、古代の神祭りでは太陽神を祀るために剣が奉じられたから、古代の神祭りが復活するためには、まず剣が動かなければならないことである。剣はスサノオ＝イナンナのシンボルで、実質の最高神がイナンナだからこそ、太陽神を祀るために剣が必要なのである。

もう 1 つは、古代では海神、日神、火神が多く祀られていたことである。出雲の神迎えの神事では龍蛇神が重要だから、それが海神を暗示しており、神宮は当然日神の暗示である。

熱田はというと、草薙神剣は当初は天村雲剣という名称だったが、日本武尊が焼津の地で火攻めにあった際、倭姫からもらった火打ち石で火をおこし、剣で草を薙いで助かったことから、草薙神剣となった。そして、本殿で祀られる熱田大神は草薙神剣を依り代とする天照大神と言われている。ならば、熱田は火神とも見なせる。また、古来、火神は雷神とも同一視され、熱田の名称は軍神で雷神のアダド＝イシュクルに因むから、宮の名称からも熱田は火神であり、祖神の天火明命は火神である。これで、古代からの海神、日神、火神が揃う。

そして、熱田の創祀 1900 年祭の日、5 月 8 日の“5”と“8”は＜神々の真相 6＞に記したように、ニンギシュジッダが創造神であるマヤ文明に於いて重視されていた金星の動き、とりわけ内合・外合から描かれる五芒星と八芒星を暗示し、金星はイナンナとイエスのシンボルで、剣は実質の最高神イナンナを暗示するから矛盾しない。（なお、出雲の 5 月 10 日は金環日蝕で「金」続きだが、金はニビルの象徴である。）また、第 62 回も 6＋2＝8 だから、イナンナを暗示する数字である。

よって、熱田神宮創祀 1900 年祭が出雲と神宮の御遷宮に先駆けて 5 月 8 日に行われることは、最高神がイナンナで、そのシンボルが金星と剣だからであり、古代に多く祀られていた海神、日神、火神の神祭り形態が復活することでもある。ならば、その際に、剣が本来の神宮である伊雑宮に遷され、太陽神を祀るために剣を奉じた古代の神祭り形態も復活する可能性もある。そうなると、それは降臨のための印であり、海神を祀る総本宮の大山祇神社（あるいは御鎮座する四国）も出雲御遷宮前後から何らかの動きがあるだろう。

それと連動して、イナンナを最高神としている日本仏教界もまた、何らかの動きがあるだろう。

＜日本の真相 7＞に記した考察と併せて、神宮の御紋である花菱の 4 つの花弁はメルカバーを構成する海神エンキ（大山祇神社）、太陽神（天照国照尊）ウツ（内宮）、火雷神イシュクル（熱田神宮、上賀茂神社）、導きの神（かつ海神かつ天照国照尊）ニンギシュジッダ（猿田彦神社）で、中心が豊受大神（かつ火神かつ水神）イナンナ（外宮、籠神社）と天照大神イエス（内宮）である。

剣が動くことによりこれら「神々」が降臨して真相が明らかとなり、イナンナが実質の最高神・豊受大神として“復活する”ことを神宮の御紋が暗示しているのなら、海部宮司が“これからは豊受大神の時代である”とおっしゃったことと一致する。そして、八咫烏が言うように、神宮の使命も終わる。

では、「その時」とは？世界情勢や太陽活動にも因るが、唯一言えることは、「神」のみぞ知る、ということである。

参考著書：
・三島敦雄著、「天孫人種六千年史の研究」、スメル學會。
・ゼカリア・シッチン著、「〈地球の主〉エンキの失われた聖書～惑星ニビルから飛来せし神々の記録」、徳間書店。
・宮坂宥洪著、「真釈　般若心経」、角川文庫。
・永田文昌堂編集部編集、「補強　神道大祓全集」、永田文昌堂。

初版：2013 年 2 月